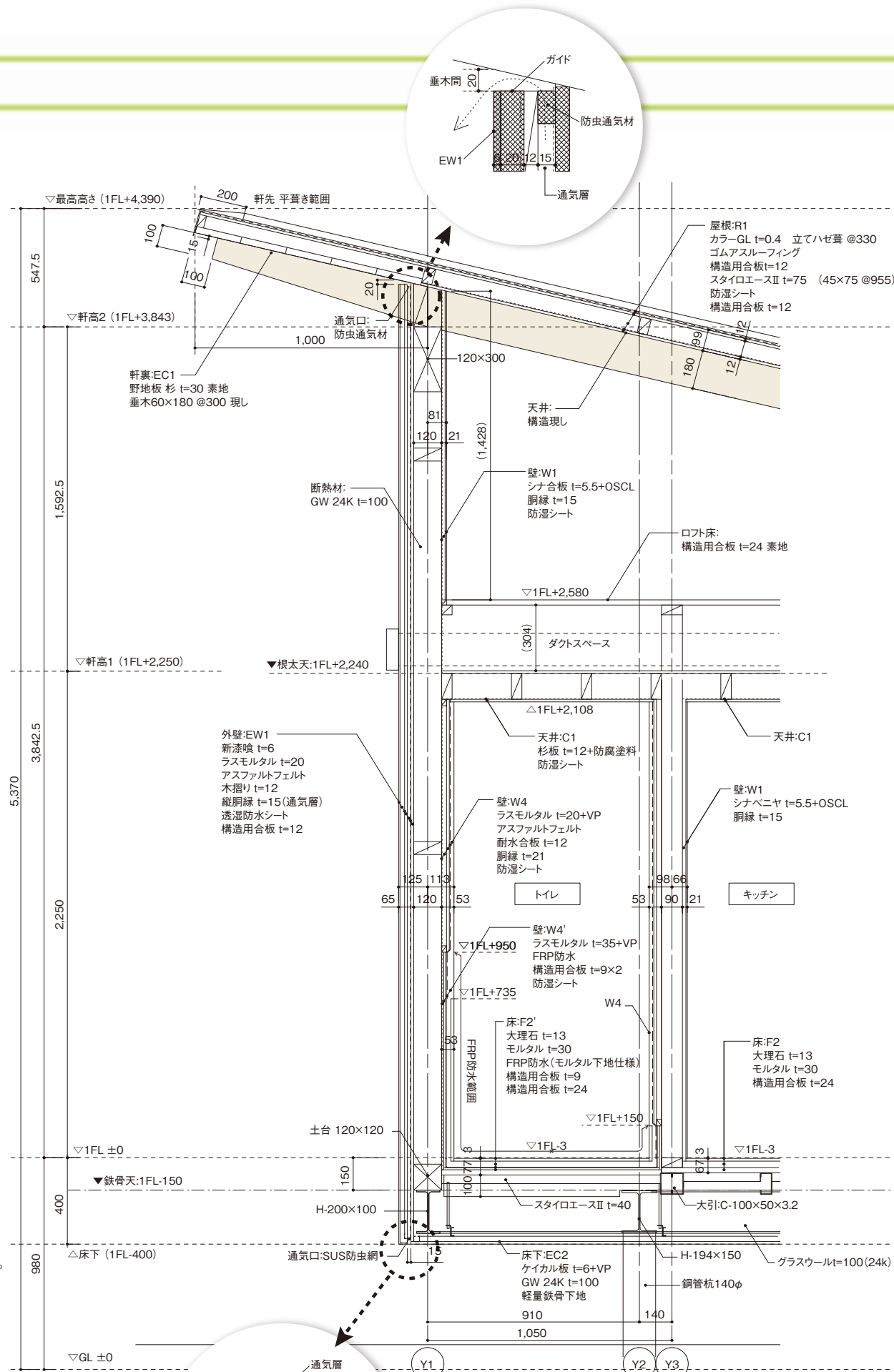


矩計図



建物本体を
8本の杭で
持ち上げる

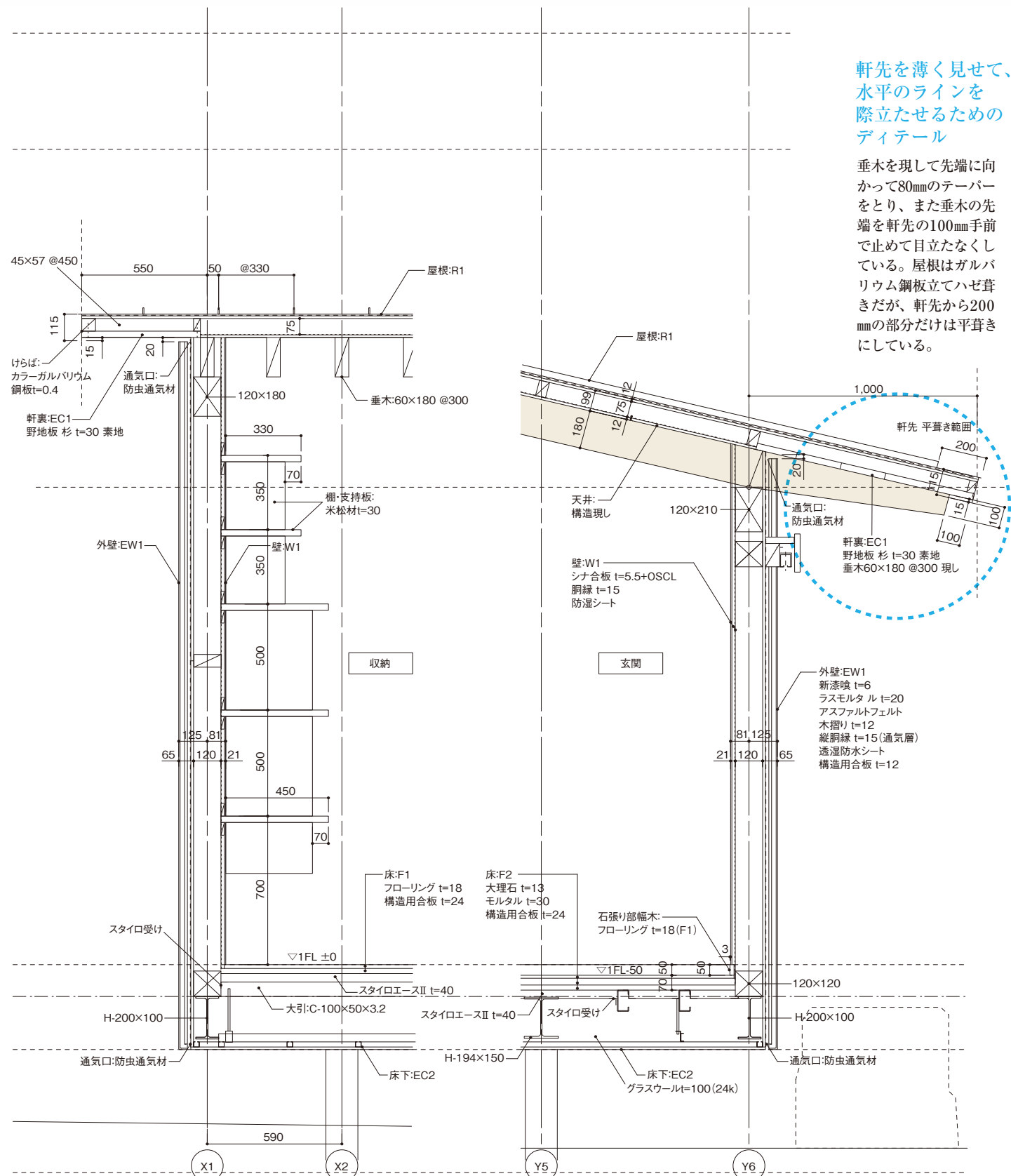
建物を浮かせたいという建築意図と、軟弱地盤対策が、杭を打って建物全体を持ち上げるという発想を生んだ。地表との隙間は土地の傾斜や起伏によって330mm～660mm。鋼管杭は140φ・長さ4,600mm～4,930mm、数は短手2本(@4,550mm)×長手4本(@4,700mm)の計8本(それとは別にデッキ支柱杭として1本使用)。表通りから入ってくる道路が幅2mあまりと狭く、この道を通って5m長の杭を打てる機械があるかどうかを事前に調べたところ、関西地区で2社だけ所有していたという。ちなみに、鋼管杭による乾式基礎工法は傾斜地で有効で、長坂さんの別の現場でも進行中とのこと。



シームレスな
漆喰仕上げ

外壁4面にシームレス
につながる漆喰仕上げ
は、そのまま床下面38
mm奥までまわり、それ
ぞれの角は現場で指示
した半径3mm～4mmの
アールとなっている。

この仕上げもあいまって、奥行きが無限にあるようにも、まったく見えないようにも見えるという、両義的見えがかりの「浮かんでいる白い壁」が生まれている。



軒先を薄く見せて、
水平のラインを
際立たせるための
ディテール

垂木を現して先端に向かって80mmのテーバーをとり、また垂木の先端を軒先の100mm手前で止めて目立たなくしている。屋根はガルバリウム鋼板立てハゼ葺きだが、軒先から200mmの部分だけは平葺きになっている。